新年あけましておめでとうございます

ボランティアと一緒に厳島神社へ初詣

▲初詣にお参りしている厳島神社(弁天さん)にて。この日は天候も良くお参り日和でした。

淡路ふくろうの郷などにご支援をお寄せいただいております皆さまあけましておめでとうございます。

どうか今年もさらにご指導・ご支援を心からお願いします。

昨年の漢字は「金」オリンピックの金メダルやノーベル賞の受賞など、たしかにそうでしょうが、私たちにとっては慢性の「金欠病」。貧困・格差と排除・制限・隔離社会に目を向けざるを得ません。

民主主義に基づく湯浅誠氏の実践知をまとめた「反貧困」(岩波新書)や、経済の分配　公正と貧困・飢餓の研究でノーベル賞を受賞(1998年)した、アマルティア・セン氏の研究実践からもっと学ばなければと、わが身を叱咤している初春です。

今年からの行動指針としたいものです。

1　美味しく食べ良い栄養状態に
2　病気の有無だけでなく夢や希望を育てあい実現を目指すという意味の健康と幸せの実感できる毎日を
3　今とこれまでの人生の否定や自己排除を乗り越えて自分を誇りに思える毎日を
4　さらに人生の先輩・後輩から教育を受け、学び続けたい。
5　早死にしないこと
6　社会の不可欠な構成員の一人として社会参加ができること、そして
7　人前で話したり、必要なことなら言い難いことを言い難い相手に言えるように
8　いつまでも愛する人の側にいたい

私の今年の漢字は「起」(「つなぐ手を広げてみんなで起ちあがろう」)

「人が良好な生活や人生を生きるためにどのような状態にありたいか、どのような行動をとりたいのか」そのための能力・行動(潜在能力)を重視しました。

(施設長：大矢)

ふくろう新聞

＜発　行＞
特別養護老人ホーム
淡路ふくろうの郷
広報委員会

洲本市中川原町中川原 28 番地 1
TEL：0799-25-8550
FAX：0799-25-8551
ホームページ
http://www.normanet.ne.jp/~hyoufuku/

2013年を迎えました。
年末には地域交流会の皆様に立派な門松を作っていただきました。また入居者の各部屋には、しめ縄を飾っていただき新しい年を迎えることができました。ご支援に感謝申し上げます。
本年も地域の皆様と共に歩んで行きたいと思います。ご支援ご指導の程よろしくお願いいたします。
(門松の画像は6面に掲載)

2013年 淡路ふくろうの郷が目標とする漢字は「穏」

ふくろうの郷の「新年の目標となる一文字」が決まりました。

「穏」やかに一年がすごせるように、との思いからこの一文字になりました。

▲笹津寛照住職に書いていただきました

▲自治会長北風さんは「笑」の一文字を

恒例の年末行事　しめ縄作りと餅つき

12月19日(水)に中川原地区老人クラブ連合会と地域交流会の皆さんにご協力いただき、恒例の餅つき、しめ縄作りを行いました。

しめ縄作りでは小学生の参加もあり、賑やかな雰囲気で70本以上のしめ縄ができ上がりました。

餅つきでは臼と杵を使っての餅をつく音と響きが大迫力で、床が震えるため盲ろうの入居者様にも餅つきをしていることが伝わり、楽しまれていました。

つきたてのやわらかい餅で作られたぜんざいが入居者に配られた時には「待っていました」とばかりに笑顔で召し上がられる方やおかわりを希望される方もいました。

（生活援助：北野）

▲ぜんざいを食べて微笑む神生さん

▲地域交流会のみなさん

▲中川原小学校６年生も参加

クリスマス会

12月25日(火)にふくろうの郷でクリスマス会を行いました。

今回は、飾り付けなど雰囲気作りに力を入れました。

サンタクロースや星飾りなど天井から吊るし、窓ガラスにも飾りをはるなど、会場はもちろん、サンタクロースに扮した職員が入居者にプレゼントを届け、入居者、職員が着ぐるみを着るなど、楽しめるクリスマス会になりました。

多くのボランティアさんや職員の協力で成功させることができ、本当に感謝しています。

入居者の笑顔や楽しんでおられる姿を見ると、改めて行事の大切さを感じました。

今年の行事ではさらに楽しんでもらえるよう取り組みたいと思います。

（生活援助：中畑）

▲吉田みさ子さんとサンタクロース

「第12回職員研究交流集会」
21 老福連～岡山～

いまこそ『復興宣言』…持ち寄ろう希望、持ち帰ろう元気！…をテーマに、21・老福連「第12回職員研究交流集会」が岡山市内で開催されました。集会には、淡路・ふくろうの郷から2人が参加、全国28都道府県から総数467人が参加されました。

第1日目の原発・放射能被害シンポジムでは、藤原秀文氏（医師）から自身の広島被爆体験を交えて、被爆後も体内に残る低量放射線がもたらす健康被害や原発の仕組みについての話しがありました。

福島県の佐藤和子氏（特養ホームはなしのぶ施設長）からは、「時間が経つにつれ喪失感・無気力感が強くなっている。それは日々放射能の恐怖におびえ、長年住み慣れた故郷を追われている福島県民のこんな大きな取り返しのつかない犠牲を払っても変わらない国の対応と先が見えない不安、家族と暮らせない孤独、家族同居の崩壊、今も止まらない自殺者など、地震・津波は過去を奪った、原発は未来を奪っている」と切実な実態を交えて報告がされました。シンポジウムを聞き、あらためて福島原発事故や原発再稼働問題について考えさせられました。

2日目は、9分科会25分散会に分かれての分科会討議で、合計146演題のレポートが発表されました。私は、「誇りと自信、働きがい・やりがいのある職場づくり」の分科会座長を務めましたが、職場の活性化にむけ研修等を重視し改善を図っている2つの報告に多くの質問が出されました。

分科会の中で、職員としての自信とやりがいを見出だしていくのか、またチームワークを向上させるための職場づくり、施設における事務の役割とは等、日々悩み考えさせられる課題などを参加者で共有し、交流を深めました。

来年の開催地は京都です。「希望、輝き、きらめき」の福祉職場実現へ向けて、次回も元気に豊かな援助実践を展開して、今度は京都に持ち寄って研究と交流を深め合いましょう、と確認し合った研究交流集会でした。

（総務：中村）

ふれあいに満ちた地域社会の実現を
～中学校閉校後の活用を通して～

昨年11月に開催された「全国聴覚言語障害者福祉研究交流会」での報告より抜粋

▲中川原中学校（平成２３年４月撮影）

ここでは開所前・開所後についてレポート報告します。

はじめに

平成23年3月淡路ふくろうの郷から見える中川原中学校が閉校となりました。それに先立ち校舎活用をどうするか？ということで中川原町連合町内会が中心となり地元住民の意見・要望を集約した結果、「老人憩いの広場というような高齢者のための健康予防、増進施設としての活用」が挙げられました。

しかし、そのニーズに応えるための財政基盤・事業の継続性という点において地域住民だけで取り組むのは困難であるということで当法人に声がかかり一部の事業を地域・法人協働で事業を進めることになり、平成24年7月8日に「中川原高齢者・障がい者地域ふれあいセンター」（以下ふれあいセンター）が開所しました。

ふれあいセンターの具体的構想誕生へ

地域と法人協働で事業を進めるに当たりまず中川原町連合町内会を中心とした地域を代表する方々と法人職員で1か月に1回「ふれあいセンター検討会議」を開催、その後回数を重ねるうちにメンバーも20名を超える構成となりました。また、地域住民に対して学習会・アンケート調査・戸別訪問調査なども行い地域の方々が望んでいるのは何なのか細かく調査を行った結果、2つの事業計画が生まれました。

(1)おたがいさま中川原

「困ったときはおたがいさま」精神で地域の困りごとは基本的に地域で解決・軽減していく有料ボランティア活動。

(2)ふれあい広場桜ケ丘

公民館ではない、皆が気軽に集まれる場。健康器具、娯楽設備（テレビ、DVD、囲碁、書籍など）等の設置、またいろいろな行事を行うことで世代間交流を図る。

この2つの事業をとおしてふれあいセンターが目指すもの

(1)人と人とのつながりの再構築

近年は「無縁社会」と言われ、隣近所にどのような人が住んでいるかわからない、あるいは家族間でさえも何十年も会っていないというのが当たり前の社会です。それが孤独死・孤立死という社会問題を生み出しているのではないでしょうか。

「自分で孤独を選んでいるのだから孤独死・孤立死が問題だと言われるのは心外だ」という意見も中にはあるでしょう。しかし、全員がその生き方を選んでいるわけではありません。最期の時まで大事な人と一緒にいたい、友人と最期の時を迎えたいという人もいると思います。そういった人たちのことを考えるとやはり人と人との「つながり」が途切れないようにするのは必要ですし、歳をとってからも新しい人間関係を構築していく取り組みは必要です。

(2)障害の有無・世代等関係ない地域つくり

多くのところで「安心・安全な地域つくり」という言葉を聞きます。もちろんふれあいセンターとしてもそれを目標としています。色々な考え方があると思いますが、我々は「高齢者・障がい者・子どもが何不自由なく生活できる地域が誰にとっても安心・安全に生活できる地域」ではないかと考えています。淡路ふくろうの郷は地域の方も多く来られ、一生懸命覚えられた手話で入所者と交流されています。今ではそれが当たり前の光景になっています。それを淡路ふくろうの郷にとどめるのではなく中川原地域全体に広げたい、また、世代等を越えた交流を促進することで高齢者は子どもから「活力」を、子どもは高齢者から「学び」を得ることができる、そのような地域・人間関係を作っていくきっかけとなるような場を目指していきます。

開所して以降の動き

7月8日、地域の方々、関係団体の方々含め約280名の方々に来所いただき盛大に開所式を行ったふれあいセンターですが、すでに様々な繋がりが生まれています。

ふれあい広場桜ケ丘では

①91歳の男性2名による40年ぶりの再会

②上は63歳、下は6歳の参加者によるゲーム大会、

おたがいさま中川原では

③困りごとを通じて生まれた新たな人間関係

④淡路ふくろうの郷入所者の困りごとから生まれた障害の有無に関係のない付き合いなど。

事業の性質上、収入の見込めない事業ではありますが、ふれあいセンターがなければ上記のようなことは実現できなかったかもしれないと考えるとお金には代えがたい意義ある事業だと思っています。

地域の声から生まれた事業ではありますが、地域の隅々への浸透はまだまだな面があります。

「ふくろうの郷が行っている事業。地域は関係ない」という声も聴きます。「ふれあいセンターは地域の声によって生まれた事業で地域住民一人ひとりが主体性を持って関わりそれを法人が応援する」という風になるにはまだまだ時間がかかると思います。

しかし、理解者を増やすことがふれあいセンターの意義向上にもつながりますし、今後も理解者を増やす取り組みを地域とともに行っていき、より多くの新しい出会い・再会が生まれる場となるよう今後も地域の皆様方とともに歩んでいきたいと思います。

（報告者：濱田）

▲入居者の困りごとを地域の方が解決する新たな交流が生まれました

淡路聴覚障害者センター便り

洲本市港2-26
洲本市健康福祉館３階

第8回社会生活教室
先ずは身の安全確保を

昼間の通所中**南海トラフ**に見舞われたら、どこの家おのころの家との合同避難訓練を行いました。

12月2日の朝、おのころの家に着き、思い思いにテレビを見たり、おしゃべりしていた最中、「緊急地震速報が流れ、数十秒後洲本市消防防災課から地震発生とのファックス受信」本番さながら机の下にもぐったりの安全確保。洲本市消防防災課の板家氏から初動体制や職員の役割、心構えの大切さの説明を受けた後、一時避難所の総合福祉会館に移動し、感想や学んだことの確認等3つのグループに分かれ、ワークショップを行いました。

参加者からは、自宅以外で被災した場合の家族との連絡方法をあらかじめ相談しておくことが大事との意見や、近隣との日頃の付き合いがなく情報を得られないなどの不安が出されました。福祉総務課担当者からは、日頃から支援を要する人は要援護者台帳を備え民生委員さんが把握していますが、まだ提出していない人は民生委員さんや福祉総務課に申し出てくださいとの説明がありました。センターとしても今後地域を巻き込んだ取り組みを進めていきたいと考えています。

（頼田）

▲「テレビ、携帯電話で“緊急地震速報”を職員がキャッチし冷静な対応を」と洲本市消防防災課の板家氏

▲「すぐ外に逃げると危険。座布団などで頭部を守り、机の下に逃げるなど、身体の安全を確保します」

▲「揺れが収まれば、職員は火元や負傷者の確認をして、第一次避難所に誘導します」

人生の終末の送り方
元気なうちに自分の意見を

午後からは“**ミニ交流会 in 洲本**”「人生の終末の送り方」についてグループ別に話しあいました。配偶者のどちらかが亡くなり一人暮らしとなっていたり、聞こえないため、日常的に子供や親戚との関係も希薄で、いざという時に頼れない不安さが語られました。

病気や介護が必要になった時
・入院しても胃ろう、人工呼吸など、延命治療は受けたくない。自然に死を迎えたい。
・娘や姪を頼りに思っていたが、それぞれの家庭の事情があり、介護を頼むのは無理かなと思うようになった。

人生の最後はどうしたいか
・最後は家で死にたいが、看とりは誰がしてくれるのか。息子の嫁には頼りにくい。
・最後はやはり老人ホームかな。でも待機者多いらしいし…。
・頼れる人いない。迷惑かけたくない。ポックリと死にたいなあ。

財産の相続は
・死後の供養を親戚に頼むにしても、そのためのお金を用意しておかなければならない。

▲グループでの話合いを発表します

まだまだ先のことだし、どうしたらいいのか考えられないよ。

入院すると、どうしても医者の意見に従わざるを得なくなる。元気なうちに、自分の考えを伝えたり、書いておくことが大事だね。

どんな葬儀や墓を希望
・家族葬がいいな。
・ろう者にとって生前の姿を写真で振り返ることができるお別れ会は、参列者にとっても故人の人生を振り返ることができていいな。
・先祖代々しきたりがあるので、宗派通りにしなければならない。先祖代々の墓に入りたい。
・散骨してほしい。
・家族と相談し、葬儀社と契約している。

お知らせ

2月6日（水）10:00～12:00
社会生活教室
難聴者のみなさん。読話の方法を学びましょう

2月26日（火）10:00～17:00
～こころのケア相談～
1人で悩まずに話にきてみませんか？

お気軽にご利用ください

お問合わせはセンターまで
TEL：0799-24-3850
FAX：0799-26-1175

楽しい時間を共有★作業所 Xmas 会★

会場の様子

おのころの家
〒656-0025
洲本市本町３丁目 1-10
清水マンション 1F
TEL・FAX　0799-26-0956

12 月 19 日(水)、聴覚障害者関連施設部会主催のクリスマス会が兵庫県立聴覚障害者情報センターで行われ、おのころの家は仲間 13 名、職員４名で参加しました。せっかく神戸まで行くのだからと、忘年会も兼ねて昼食も済ますことになりました。

２台の車で出発。まずは、神戸文化ホール２Fにある和風バイキング「紫陽花」へ。和食を中心に様々な料理が並べられ、みなさん、いつもとは違う雰囲気についつい箸が進んでしまうご様子でした。デザート・コーヒーまで一通り済まし、みなさん、大満足の笑顔になりました。

午後はクリスマス会で拍手と笑い

兵庫県下４つの作業所・総勢 83 名が集まりました。一人ひとり簡単な自己紹介を済ませたあとは、いろんなゲームで交流です。伝言ゲームではおのころの家の仲間も参加しました。手話を使わず、身振りで伝えていくのは難しく、お題が「ハト」の時、最終的に「ニワトリ」になってしまいました。すると、「それじゃ、ダメだよ」とアドバイスされた方の表現が「ハト」そのもので、会場から拍手と笑いが起こりました。最後にプレゼント交換。全員で一つの大きな輪になり、「せ～の！」の掛け声と共にプレゼントを右に回し「終了～」の合図で、その時、手にしていた人の物に。様々な中身にみなさん驚かれたり、喜ばれたりされていました。

伝言ゲーム。この段階ではどちら？
「ハト」？「ニワトリ」？

おやつに「おのころ屋」のクッキーが出されたのですが、みなさんに「おいしい」と言っていただきとても嬉しかったです。

今回は残念ながら豊岡は不参加でしたが、県下の作業所が楽しい時間を共有できるとても良い機会でした。「来年も参加したいね」とみなさん言っておられました。　（担当：藤本）

一年を振り返る

おのころ屋
〒656-0025
洲本市本町７丁目 3-41
営業日時：月～金 9:00～18:00
TEL・FAX　0799-22-6133

昨年の 12 月におのころ屋が開店して一年を迎えました。多くの皆様のご支援、ご協力をいただきながら、地域の皆様にも支えられた事が大きな力となりました。本当にスタッフ一同心から感謝しております。

試行錯誤から美味しいクッキー・パンに

昨年の秋からクッキーを作り始めたのですが、購入した業務用機械の使い方が分からなかったり、材料を買いに毎日何度も近所のスーパーへ走ったり、オーブンの温度調整も試行錯誤の繰り返しで、上手く焼けませんでした。おのころの家の皆さんに試食して頂き、厳しい評価をいただいたり、ほめていただいたりと手探り状態が続き、はたして商品化できるのか？売れるのか？との焦りもありました。しかし、寒くなって手が荒れてきても黙々と作っている仲間の様子を見ていると職員も頑張らなければいけないと思いました。

まずは美味しいクッキーを一袋百円で作る事を目指しました。4月からパンを売り始め、年末には予約注文も入ってくるようになりました。ほぼ一日中オーブンが動いている状態になり、忙しい毎日が続いています。利用者も５人に増え、それぞれの特性を生かした持ち場で働き、仕事にも馴れてきました。しかし、同時に職員２人の負担が増え、おのころの家に応援もお願いすることが増えました。利用者への援助、販売、金銭管理、事務処理、材料発注等、休憩もなくフル回転している状態です。でも、それを支えて下さっているのは仲間の笑顔と頑張りです。

気を引き締めて

新しい年を迎え、新商品作りや移動販売、また「中川原ふれあいセンター」での事業展開など盛りだくさんの計画があります。益々忙しい年になると思いますが、職員体制を固め、利用者共々、今まで以上に気を引き締めて皆様に美味しい食品を提供させて頂くことを目標に頑張りますので、宜しくお願い致します。　（担当：岡本）

続・地域を語る

第49回 当たるも八卦、当たらぬも八卦

多田鳴鳳師の占い

三原郡八木村(南あわじ市)の「猪之助」と言えば、誰も知らぬ財産家であった。

ある日、鳴鳳先生を招いて猪之助の将来の運勢を占ってもらった。

鳴鳳先生は慎重に占って「御一身上、無上の好運限りないが、特に意外な災禍が起こりますが、お心あたりはありませぬか」と告げた。

首をかしげながら猪之助は「一向に心あたりはありません」とのこと。

「当たるも八卦、当たらぬも八卦、と言いますように、ともかくご用心下されや」と告げて猪之助宅から安坂へと帰ってきた。

その後、まもなく猪之助が取引した銀札に贋造紙幣(にせさつ)が見つかった。

役人に呼び出され、にせさつについて取調べが始まった。

にせさつについては厳しいおとがめが決められている。

猪之助も極刑に処せられることは覚悟の上であったが、身の上には何の覚えもないこと。

明日はおさばき、前の日に役人に呼び出され

「猪之助よ、にせさつについては何の覚えもないよし、それならば取り引きした商いを思いだしてみよ、何なりと遠慮なく申せ、それによって証拠が出てくれば刑はまぬがれるであろう」とのこと。

よくよく考えてみると思いあたることがあった。そして猪之助は

「いまわの際に何も申すことはありませんが、ただ、ひと言、申し残したいことがあります。私の家の倉庫の二階の長持ち二杯に入れてあります銀札を焼き捨てるようお奉行さんにお伝え下さい」とのこと。

役人達は猪之助の申立てにより、二階にある長持ち二杯の銀札を一部始終調べたところ、果たして多数の偽札が見つかった。

中には○年○月○日、だれより受け取ったと書いてあったことから証拠が揃っており、役人達は猪之助の正確さに驚くとともに、疑いも晴れ、役人の疎漏を認め直ちに解放されたという…

この一件が世上に伝わり、今さらのように鳴鳳師の占いの正確さに一驚したという。

※中川原村史より引用する

◆お詫びと訂正
12月号の文中で誤字がありました。
誤「床屋」→正「庄屋」

規則・礼儀を守り 義理人情を大切に生きた 祖母との思い出

坂口きぬゑさん（享年98歳）

昨年11月に98歳でお亡くなりになった坂口きぬゑさんは淡路ふくろうの郷開所時から中川原町内より入居された方でした。

今回ご家族・孫の坂口雅一さんから、祖母きぬゑさんへの思いを寄せていただきました。

きぬゑおばあちゃんが淡路ふくろうの郷に入ってから亡くなるまでこの6年、職員の皆様には大変お世話になり、ありがとうございました。

両親が共稼ぎということもあり幼いころよりきぬゑおばあちゃんと過ごすことが多く、おばあちゃんっ子で育ってきました。

潮干狩り、花見、買い物、農作業、お風呂、就寝と親以上に一緒にいたのは今でも鮮明に覚えています。

きぬゑおばあちゃんは、とにかく規則、礼儀にかけては誰にもまけない真っすぐなところや、義理人情というものを日々大切にしていました。

会葬の時にご住職さんから昔のお話をしていただいたとき、「きぬゑおばあちゃんは本当に昔から誰にもやさしく丁寧に接してくれたこと、傲慢な一面をもったじいちゃんに仕えて常に亭主関白で支えておられた姿勢は本当にすばらしかったです」ということを聞き、きぬゑおばあちゃんの人柄の良さ、偉大さを改めて実感しました。

残念ながら私は孫(男)でありおばあちゃんの分身にはなれませんが、いままで教えてくれた義理人情の志はいつまでも受け継いでいきたいと思います。

98歳の大往生という人生のお手本を超えられるように日々過ごしていきたいとおもいます。

勝楽進・佐代子夫婦が自分史を出版

初めて入居者の「自分史」が完成。
ご希望の方は総務へご連絡下さい。

サンタクロースマラソン参加

12月16日洲本市内で開催された「サンタクロースマラソン」に淡路ふくろうの郷入居者で盲ろう者の藤本紀代さんが介助者と参加され、約100人の老若男女のサンタ姿のランナーと共に交流を楽しみながらコースを完走しました。

2013年の門松

▲地域交流会に作っていただきました（1面より）

看護師　募集中！
調理員（パート）も募集しています

◆給与・労働条件等、詳細は下記までお問い合わせください。
○お問合せ：淡路ふくろうの郷（八木）まで
TEL:0799-25-8550